

やな漁は、秋になると産卵のために川を下る鮎の習性を利用して行う。「川の水が少なくて、鮎は川を下りたくても、下れなかった。昨日の雨で一気に鮎が下がり始めたんだ」と、この日の大漁の理由を教えてください。後になってこの漁場を訪れた阿多古川漁協の組合長・石川さん。「鮎はいつになったら、どこに行けばいいか、ちゃんと知ってるんだよ」という。まるで鮎のスケジュール帳でも確認してきたような話だが、それもまんざら嘘でもない。石川さんは「川を毎日見ていれば、鮎がどうしているか分かるようになる」と笑う。阿多古川とともに歩んだ人生は、もうすぐ90年。説得力が違う。驚くことに、今も滑りやすい河原をスイスイと歩くそうだ。坪井さんはそんな組合長を「川の歩き方が違う」と表現してくれた。

石川さんは、やな漁の名人でもある。この日は、朝5時半ごろから漁をし、捕った鮎は、20キロメートルも離れた天竜川の下流の産卵場所まで行って放流してきたそうだ。その量およそ30キログラム。魚の数はすると500〜600匹に相当する。ただ漁を楽しむだけでなく、鮎の生態のサイクルにまで配慮した暮らし。ここまでのことができるからこそその「名人」であると、本当に頭が下がる思いがした。

鮎を愛する名人

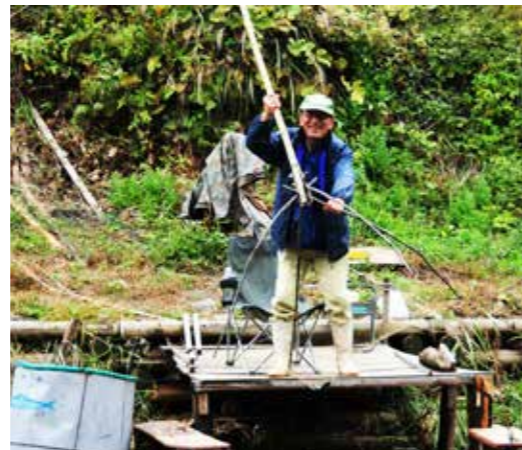
「おーい、どうだ。たくさん捕れたか」と。その度、鈴木さんはうれしそうに顔でこの日の成果を伝えた。

暮らしと伝統

阿多古川のやな漁の面白さは、独特の漁法と道具にある。竹や杭を使って堰を作り、それを伝って泳いでくるところを「四つ出網」と呼ばれる道具ですくい揚げるのだが、このような漁法は珍しいそうだ。同じ「やな」と呼ばれる漁法は全国各地にあるが、やり方は土地土地で異なるのだとか。石川さんの話では、阿多古川のやな漁は、安政年間（1854〜1860年）から行われているという記録もあり、古くから伝わる漁法のようなのだ。「阿多古川の川幅や淵の形が、このやり方に向いている」と石川さん。



阿多古川のやな漁の面白さは、独特の漁法と道具にある。竹や杭を使って堰を作り、それを伝って泳いでくるところを「四つ出網」と呼ばれる道具ですくい揚げるのだが、このような漁法は珍しいそうだ。同じ「やな」と呼ばれる漁法は全国各地にあるが、やり方は土地土地で異なるのだとか。石川さんの話では、阿多古川のやな漁は、安政年間（1854〜1860年）から行われているという記録もあり、古くから伝わる漁法のようなのだ。「阿多古川の川幅や淵の形が、このやり方に向いている」と石川さん。



阿多古川ならではの漁法
天竜区内には、天竜川をはじめ、その支流の阿多古川や気田川など豊かな水資源がある。いずれの川も鮎釣りの人気スポットであり、6月初旬の解禁日に釣り人たちが竿を持って列になっている光景は、天竜区の初夏の風物詩だ。友釣りを中心の夏の鮎釣りシーズンは終わると「やな漁」の季節を迎える。やなとは、竹や木などで水をせき止めて、魚を捕る仕掛けのことだ。
11月初旬、阿多古川漁協の坪井さんから一本の電話をもらった。「やな漁が始まったら、連絡してほしい」と夏の初めにお願ひしていただいたので、こちらもすっかり忘れていた。例年、やな漁は10月から11月がピークと聞いていたが、秋になってから雨が少なかった今年は、漁がなかなかできなかったそうだ。「今日は、朝からたくさん鮎が捕れているよ」と坪井さん。昨夜は、まとまった雨が降り、久しぶりに阿多古川は水量が増していた。

暮らしが見える。感じる体温。
Tenryu + Plus

昔からのやり方を知る人だからこそできる仕事なんだよな。